

現代青年のいじり-いじられ関係志向を規定する要因の検討

—ひとりであることへの不安, 役割への適性感覚, パーソナリティ特性との関連を踏まえて—

小鳥 萌子

近年, 青年期において, いじり-いじられ関係を好意的・積極的に受け入れる傾向が報告されている。しかし, 何故, 青年において, このような傾向が見られるのか, その理由は明らかにされていない。そこで, 本研究では, こうした傾向を「いじり関係志向」と捉え, 次の3点の分析を行い, いじり関係志向を規定する要因について, 検討することを目的とした。第1に, 親密さの回避や孤立への不安が高いほど, いじり関係を志向する傾向が見られると仮説を立て, ひとりであることへの不安との関連を検討した。また, いじり-いじられ関係を志向する傾向は, 特定の役割を認識し, その役割を演じることを肯定的に評価する傾向と関係があると予想されたため, 第2に, 役割への適性感覚との関連を検討した。続いて, 第3に, いじり関係志向, 役割への適性感覚, ひとりであることへの不安は, どのような個人特性と関係しているのかを, Big Fiveとの関連に基づき, 検討した。大学生・大学院生308名を対象に, Google Formsを用いたオンライン調査を行った。調査内容には, デモグラフィック変数(性別・年齢), いじり関係志向尺度(小鳥・小平, 印刷中), 役割への適性感覚項目(本研究で作成), ひとりであることへの不安(吉田, 2014), Big Five尺度短縮版(並川他, 2012)であった。強制投入法による, 重回帰分析を行った結果, 役割への適性感覚から, 各いじり関係志向指標に対し, 正の効果が認められた。続いて, 有意な結果を示した交互作用項について, 単純傾斜分析を行ったところ, 男性では, 親密さの回避, 孤立への不安が低い場合に, いじられ適性がいじり選好を高めることが示された。さらに, Big Fiveといじり関係志向指標間の関連は, 単相関分析を行った場合と, 偏相関分析を行った場合で, 結果に違いが見られた。ひとりであることへの不安は, いじり関係志向を直接的に規定するのではなく, 役割への適性感覚を調整するように, 間接的に関連することが明らかになった。さらに, 相手との関係を意識する場合に, 役割を選好する場合と, 関係を意識せず役割を選好する場合とでは, パーソナリティ特性との関連が異なることが示された。しかし, 各尺度得点間の関連は強いものではなく, いじり関係志向の規定要因について, 十分な検討はできていない。そのため, 今後は, 冗談関係を形成した過去の経験や, 視点取得などの他の要因を取り上げ, 検討を重ねていくことが求められよう。